

観測器具から観測資料までもが重要文化財
剛立、至時、重富、傑出した大坂の天文学者たち



間重富肖像(大阪歴史博物館蔵)

“中秋の名月”の季節となった。陰暦8月15日が十五夜で今年は9月15日がそれに当たる。そこで空を見上げていたら、大阪の天文学にとって記念の年であることを思い出した。町人学者で天文学に通じ、幕府による寛政の改暦にも功績のあった間重富(1756~1816、長涯とも号す)が、文化13年に没して、ちょうど二百年なのである。今春、大阪市が所蔵する「間重富関係資料一括」(大阪歴史博物館654点、大阪市立中央図書館87点)も、国の重要文化財に指定された。

間重富は、長堀富田屋町(現・大阪市西区新町2丁目)に生まれた。十一棟も蔵が並んでいたことから十一屋と呼ばれた裕福な質屋の主人で、七代目十一屋五郎兵衛を名のる。商才にも長け、自らの代で蔵が四つ増え、「十五楼主人」とも号した。

大坂には、本業とは別に知的好奇心に富んで、学問に打ち込む「町人学者」の伝統がある。重富は、天文学に通じて天文学家と呼ばれ、重文指定された資料も、天体の測量記録や著述、典籍、観測機器、地図絵図などで構成されている。北堀江に住む、博物学者の木村兼葎堂(1736~1802)とも親しかった。

江戸時代の大坂を語るには、天文学が欠かせない。重富が天文学を学んだ麻田剛立(1734~1799)は、豊後国(現・大分県杵築市)の出身で、独学で天文・医学を学び、ケプラーの第3法則を独自に発見したとされる。宝暦13(1763)年に日食を予言して名声を高めた。明和8(1771)年頃に大坂に移る。オランダ輸入の高倍率のグレゴリー式望遠鏡によって、日本最古の月面観測図を記するなど、理論を実測で検証する近代的な学問の姿勢を貫いた。月面には、その名にちなんだクレーター「アサダ(Asada)」がある。

剛立の弟子には重富以外に、大坂の同心であった高橋至時(1764~1804)や山片蟠桃(1748~1821)もいる。全国を測量して『大日本沿海輿地全図』を作成した伊能忠敬(1745~1818)は至時の弟子であり、重富の指導も受けた。当時の日本は太

陽暦ではなく、月の満ち欠けの周期に基づく太陰暦を基礎として、太陽の動きによって閏月を入れる太陰太陽暦を用いていたが、不備が目立つようになり、寛政10(1798)年に新しい「寛政暦」が作成される。「寛政暦」を作るべく、大坂から幕府天文方に招かれたのが高橋至時であり、重富も同行して、天文方と同格の待遇を受けた。

重富も観測器械を職人に作らせ、帰坂してからは、西長堀の富田屋橋など橋の上で天体観測したという。幕府の命により橋の通行人を止めての観測であり、大坂商人としては「ご迷惑おかけしてすみません」という感じだったかも知れないが、天文学者としての実力が国中に認められていたことの証しでもあるだろう。長堀通りの中央分離帯(大阪市西区)に「間長涯天文観測の地」の石碑がある。

重富や至時の名前は世界にも発信され、小林隆男氏が発見した小惑星の名称は彼らに因んで「10832 Hazamashigetomi」「12365 Yoshitoki」である。7月には、大阪市立科学館の嘉数次人氏の『天文学者たちの江戸時代一暦・宇宙観の大転換』(ちくま新書)が刊行された。嘉数さんは、いかにも江戸時代の天文学家らしい風貌であり、新書も、大坂を本拠とした天文学者たちの活躍を熱く、分かりやすく描いた好著である。

現代の大坂にも、会社を経営したり、企業や役所に勤務しながら、学問や芸術、文化活動など多彩な分野で、趣味の域を超えて高度な活動をしている人たちがいる。そういう活動が、社会に知られ、評価されるようになれば、もともと、自らの知的関心や審美眼で突き進む「町人学者」の伝統ある大阪のモチベーションもあがるだろう。



間長涯天文観測の地の石碑。(西区長堀道(地下鉄「西大橋」))

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大坂イメーヂ増殖するマンモス/モダン都市の幻像一』(創元社)など。